農家にとって大切なもの

横島支部　　本山　透

私がミニトマトを生産している横島町は、有明海に面した平坦な土地を利用し、いちご・丸トマト・ミニトマト・ナスなどを中心に施設栽培が盛んに行われている、全国でも有数の施設園芸の産地です。

我が家は 4 代続く農家で、父の代からミニトマトを 6 反作るようになりました。小さい頃からの農業に対するイメージは、「暑い中の仕事」、「休みも無く大変」というものばかりでした。高校卒業後、熊本県立農業大学校へ進学しましたが、学生の頃は農家になるつもりはなく、就職したいなと思っていました。

実際、父の考えとしても、農大を卒業後すぐに農家をさせる気はなく、「一度自分で仕事してお金を稼いで来い」、「農家をするか悩むのは 30 歳くらいでも遅くはないから」と、就職を後押ししてくれました。

卒業後は、農機具メーカーに無事に就職する事が出来ました。配属先が鹿児島県という事もあり、なかなか家に帰らない日々でしたが、就職して 2 年目のある日、父がヘルニアになり、一部の農作業が出来なくなってしまいました。当時は研修生と従業員の方がいたので、どうにか収穫は出来ていましたが、その他の仕事は父が主で行っていたので、母や従業員の方では対応が難しく、私は毎週、鹿児島から帰ってきては、農作業を手伝うという生活を続けていました。

翌年の年末、突如父から「2 人で話がある」と言われ、何事かと思いながら話しを聞くと、父の口から出た言葉は私にとって信じ難いものでした。

「自分の体があまり良くない」、「もし今帰ってきても 1 年間農業を一緒に出来るかも怪しい状態にある」と告げられました。また「本当に農家になりたいなら、すぐに仕事を辞めて一緒に農業をしよう」、「何年一緒に出来るか分からないが、1 人前にしてやる」と言われました。

就職当初、10 年間は勤めろと言っていたのに、いきなり家業を継ぐ選択肢を与えられ、私はすぐに返事をする事が出来ませんでした。農機具メーカーの仕事もやっと覚えてきて楽しいと感じる事が出来るようになった矢先、このまま家業を潰してしまっていいのかと誰にも相談出来ず、悩んで、苦しかった事を憶えています。ですが、最終的に「やらない後悔より、やって後悔しよう！」そう思い、家業を継いでミニトマト農家になろうと考えました。

農家をすると決めて数日も経たないうちに、地元で農家をしている先輩が訪ねてきました。その先輩については、名前と顔を知っている程度でしたが、「青壮年部への加入」や「色んな行事ごと」に誘ってもらい、玉名で農業をしている同世代の方々との交流も増えてきました。農作業も多忙で体調も良くない父は、そんな私を「農家の財産は『友達』と『仲間』だから、たくさん遊んで来い！！」と快く送り出してくれました。

しかし仕事では厳しい父は、まだ 1 年目の私を「なんでこがんこつもでけんとや！」と怒る毎日でした。当時は「この人は病気していてもこんなに元気だからすごいな」という思いではなく、「まだ何年も仕事出来そうだから大丈夫、まだ教えてもらえる」と楽観視していました。

ですが、就農 2 年目には通院や検査入院が増え、一緒に農作業する時間が減ってきました。唯一の救いは農作業で使うトラクターや管理機、防除機械等、前の仕事で取り扱っていたので、基本操作などでは困ることはありませんでしたが、栽培管理ではまだわからないことが多く、次は何の作業をしたらいいか毎日電話し教えて貰いながら仕事をしていました。

その更に翌年の、私が農業を始めて 3 年目の 25 歳の夏に父が亡くなりました。一緒に農作業できたのは 1 年半ほどで、これからどうなるのだろうと、どうして行けばいいのだろうと、とても不安で頭が真っ白になりました。

父が亡くなった数日後にはミニトマト苗の定植第一陣が控えていたので、すぐに仕事をしなければなりませんでした。しかし生き物相手の仕事で半人前の私が上手にこなせるわけもなく、水の管理や誘因・ミニトマトの防除等、まだ完全に理解していな

い仕事が多く、困っていました。しかし、毎日のように「父の農家仲間や友人達」が訪ねてきて、ちゃんと仕事ができているか見にきてくれたり、この時期はこんな病気が出やすいからと、使う農薬を教えていただいたり等、かなり気にかけていただいていたと思います。

　そこで私は、父が生前言ってくれた、「農家の財産は『友達』と『仲間』！！」の本当の意味を心から理解する事が出来ました。

　横島町は熊本県下でも若手後継者が多い地区になります、それでも昔と比べると全体数は少なくなってきています。減少している今だからこそ、横島町の魅力と農業の素晴らしさを同世代の農家仲間たちと伝え、衰退しつつある横島の農業を盛り上げていきたいと思っています。